

池田 良穂

(大阪府立大学
名誉教授・客員教授)

の

新
クルーズ
学

▶78◀

断崖の上の白いサントリーニの町
と、寄港する3隻のクルーズ客船

エーゲ海クルーズ

陸上観光に比べてリーズナブル

久しぶりにエーゲ海クルーズを楽しみました。

エーゲ海は、地中海の最も東に位置する多島海です。北はギリシャ本土、南はギリシャ領クレ

タ島、東はトルコ本土に囲まれています。古代ミケーネ文明、アテナイ島は海が荒れるため休業で、南はギリシャ領クレタ島の都市文明が発祥した海

であり、ペルシャ、東ローマ帝国、ペルシャ、オスマン帝国なども、この海の周辺で繁栄しました。この紺碧の海に浮かぶ美しい島々、そして歴史のある沿岸地域を訪れるのがエーゲ海クルーズの魅力です。

今こそカリブ海がクルーズのメッカとされていますが、一昔前まではエーゲ海の方が有名でした。アテネの外港であるピレウス港から、ギリシャ船主の運航する1万総トン前後までの小型クルーズ客船がたくさん出ていました。シーズンは、

さて今回、乗船するクルーズを探してみると、ピレウス発着の船はほとんどありませんでした。

の船が10万トンを超えていたため、各社は発着を近隣の港にシフトさせました。

あつても小型の高級船で価格も高くて家族連れには無理。そこでイタリヤ発着のエーゲ海クルーズを探してみると、北米船社が運航するベニス発着のクルーズが見つかりました。ただベニス発着といふものの、ベニスカラ列車で3時間ほどかかるラベンナ港の発着でした。実は、かつてピレウス発着のクルーズはギリシャ籍船の独占状態で、アメリカ生まれの大型船は発着港をイタリアの港に求め、その拠点の一つがベニスだったです。

乗船したのは「エクスプローラー・オブ・ザ・シーズ」というロイヤル・カリビアンが運航する14万総トンの船でした。旅客定員は4500名あまりで、乗船したクルーズも満船状態でした。土曜日の夕刻にラベンナを出港して、翌々日の昼ごろにエーゲ海のサントリーニ島に到着して、断崖の上に造られた街を散策しました。

は白壁の家々からなる迷路のような路地に、カフェ、レストラン、お土産屋さんが並び、海岸線に出ると有名な風車の並ぶ丘が現われました。

この後、船はラベンナに戻る途中でクロアチアのスピリットに寄港。この旧市街もとても魅力的で、地中海の魚料理も堪能しました。イタリヤ、ギリシャともにホテルもレストランも日本の2倍はして、いまや世界ではもつとも安く旅行のできるのには日本だということを実感しましたが、それに比べるとクルーズの料金はリーズナブルで、お買い得でした。「陸上

しかし、大型船ラッシュとなったベニスはオーバートゥリズムへの反感が強まったため、発着船を10万トン以下に制限しました。今ではほとんど島に寄りません。

翌日は、早朝にピレウス港に到着して、家族はタクシーをチャーターしてアテネの観光に。筆者は近隣のエギナ島とサラミス島にフェリーで往復してシップウォッチング。4日目には、ミコノス島に寄り、旧市街

必要」という北米のクルーズ会社首脳の言葉が蘇ってきました。